







新刊  
2846  
2

山之井 秋部

初秋

文月 けさ乃娘

玉のたま

きれふ乃元にくる氣も  
何とぬと吹風をひやりと  
けさい方にきれふ乃娘  
くるく手定もたらぬや  
ひきふ海あつても登寝  
を忘れぬれぬ病も乃乃  
虫れきと海さびーさの  
かされきときつふされ  
桐も柳も一ううりふ  
知れる池乃んふふと





うびしをれそふちやけき秋  
んれきもくろくあるやあけ  
風よ此家の文目<sup>ふしめ</sup>のきりや

亭午 織女 ねぎめ

阿比志川

乞切奠

郭象

握乃系

今日いまだ節法にて世り  
索餅と目ゆる事あり。  
書れんセタムはりとて。  
香燭より欠ぐ事。筆は  
人に授てそとく庭り  
そとにのりぬ糸を竿に  
ひて。祿ぐひ乃事とて是  
とむひり。七つ名鹽り  
多とられて大なる是れ  
ひくり城ふとるりあど  
何あ所とあり。於此に



書をうへし宮女も糸針  
あど月ひわやこれ紗のめ  
うびーくももらいで  
おろれくももろかこ  
につあけくも向ーする  
事一あびていへくは  
されんセタに七書うく  
らんともやあてさむ  
らんらんめくもどやう  
あもつう。こよひひさ  
つる星れりそわる文よ  
河東乃義人天帝れいすあ  
うく西勢乃れをめく

うへう。あう何れと教わ  
指めく。うくにうあへ  
れああ。帝もと機り  
あひく河西乃常牛吏  
に嫁あめふ。それうり  
織女あひけつひ。髪  
くうあどかもさうりよ  
カさな。て機あう  
ももらう。機あう。あ  
えんともひう。天  
帝もさうりてせめ  
よびか。て帝いめやと  
乃りい。うに何あ



とやうに流るゝ海く  
あつきたるにうひ。馬龍うまきり  
来て銀河ぎんがよとこころ  
つ橋はしあり。織女おりひめとつ  
ちとわひるさうひあど  
ゆと。うひと雲のわ  
とるれど。神かみものかぎり  
流星りゅうせい乃較くらあもわあり。依よ  
れ恨うらみい何月なんげつ春川はるがわ波なみりも  
かぐへんさうらまうあへ  
くひるはへ。う  
でもたうさうさうれ  
まは。仲人なこうどるまや宵よの月つき

ま男おとこあれやうひや  
あどとつり。又また常とこ津つ織おり  
女を乃の名なにうへて。うしばあ  
あまはれて何なんやも。うな  
きぬくろてさうあ  
とつひゆるさうやに  
は井いれあさう人ひと奴やつと何なん  
ひれをさう。早はやもあ向むか  
梶かぢ乃の義ぎりあうくるあ  
とゆる。浅あさ梶かぢの紫むらさふり  
せんさう。あ。う。よ。セせ夕ゆふ  
乃の屏ふ風ふうあどやうに  
さう。れ。う。さ。は。







てゝもあつうく乃持佛の  
あろしき米枝豆根草  
あどおせきまてふてふ  
つ。松破子らふやう松の  
相調へて。あつうくれん  
あつハさうさう。きて松  
まじるれー。そ縁法界  
にいづるよそ。あつう  
あつう。されどもあせがき  
あつ火乃車れふけさも  
うちたふんぞとては穴  
あつにうやそれ地獄の  
あつひあつんをふひやう。

麻マはくれ杖ツヱはくじんようろ  
ひヒを悲かなしこ煙けむりのたき木き  
乃すなはちどとき饒ニギハヤヒ魂たまぐうと何  
これこそ又蓮葉れんえつよがらめく  
病やまひものるじん人玉ひとたまり  
あそへわえさせんきころ  
病やまひけさと赤神あかかん洞ほらり  
ふせ入てうきをとり  
ふあといふ一

正月にやうな暮らをするを飛  
かむおつわんびる具だまうの政と  
<sup>かり</sup>  
躍ハナと時一こく福ど  
<sup>きり</sup>  
小為躍小町やうにあどやう







いふらん。又茶花といふ  
り。さでひくらさうあ  
そといふ。そと又何さ  
ゆふられさう。そと  
う。ゆれがんきさう  
な。花の。うちきう。う  
とさう。つ。と。あ。然。  
作。ん。い。う。り。さ。や。さ。  
ま。と。茶。む。乃。う。み。す。白  
と。う。ん。ち。い。さ。の。座  
れ。と。あ。ひ。さ。つ。や。う。ら  
なる。仙。翁。花。け。い。と。う。  
ま。と。い。さ。づ。る。海。な。や。う。

いふまう。つ。て。い。う。て  
かうん

あ。ま。れ。な。き。な。花。菊。桔。梗。と。花  
こ。う。い。う。や。林。の。花。を。い。ふ。同

女郎花

ち。海。り。い。く。あ。る  
こ。う。野。や。こ。い。山

と。こ。う。い。う。の。美。人。茶。花。の  
ふ。れ。な。う。う。さ。に。こ。う。て。  
た。ん。れ。き。さ。う。か。い。に。い。ひ。あ  
て。花。を。い。ふ。と。い。ひ。て。い。ふ。れ  
か。ん。さ。う。す。げ。あ。や。う  
あ。い。か。の。い。う。花。野。は  
さ。て。れ。さ。う。過。こ。う。と



いひけりおはふふふ  
 と鬼やうなひーとさう  
 ひれ風乃ちる残る勢く  
 うわさハ女氣くくもじり  
 あく男やまあふもつひ  
 人りかろあふふあれ  
 遍昭乃びー名残やうて  
 惜きとらきると作れる  
 帆心いー人をあひは  
 けて倍いふふふあや  
 つるあふとさうり  
 三日月あふふあふたにんあ  
 いふき残るふ女氣く女氣く

女部むりうあふふこやあふ

齋藤農別出年ノ人ナリ別号帆幸

若列ニある

世田正式ハ和州郡山ノ屋主ナリ

はるさけあふふあふふあふ

萩  
萩くく下なき 萩の勢  
萩の風 萩の勢

いせうふあふふ

萩の風乃ちるあふふあふ  
 何れぐ萩風の口あふふ  
 宿あふふいひうふあふ  
 せうやきあふふあふふ  
 又かきあふ萩やあふふ  
 萩風の地うふあふふ



[illegible]

蕨

そつとぬれき

萩風より入る夢れ  
 何れも萩風の口おぬ定<sup>ちやう</sup>  
 宿<sup>やど</sup>あともいひ。うるひ夢。  
 せうやき夢もきこる。  
 又かざちに萩やそらごと  
 松風乃地うるひあともいひ。







山々紫雲にふもよみぬと云  
ぬつりける日と夜と

後書やうもはくはくふのたふ

萩 あふき もと あふき の萩

野き まふき 小萩

萩 あふき 萩の萩 萩の萩

萩 あふき 萩の萩 萩の萩

萩 あふき 萩の萩 萩の萩

こぎの あふき 萩

とき の萩 あふき 萩

月の萩 あふき 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩

あふき 萩 萩







て。海どのの陰なりと。う  
 わきうといひ。かゝるむり  
 嘆き。芝葉をひのく。海  
 うと。うと。うと。あら。も  
 だらう。祠とも。結。う。わりを  
 めづ。う。は。と。う。ふ。う。神。香。が。  
 う。ち。や。う。ま。れ。か。け。う。う。か  
 と。と。い。ひ。葉。香。待。と。も  
 う。へ。て。い。ひ。ゆ。る。又。ま。う。の  
 ら。ん。ぶ。く。れ。葉。村。り。か。く  
 れ。ー。ん。ぶ。く。う。う。う。る。丸。う  
 修。り。よ。出。ー。う。ら。ぶ。う。ぬ  
 と。と。い。ひ。あ。ー。ゆ。る。

きり。魂。と。い。は。け。い。葉。香。待。葉  
 秋。の。節。よ。う。ぬ。書。き。と。き。ん。が。雲

朝顔 葉牛花

何さ。が。い。れ。り。た。う。り。て。  
 露。乃。う。ま。れ。る。と。え。ら。や。と  
 い。ひ。あ。ー。ま。が。り。を。い  
 さい。れ。ま。と。と。ん。あ。せ。う。  
 か。乃。や。き。れ。み。に。う。り。て。何  
 ぶ。や。う。あ。ー。ぬ。れ。の。あ。う。う  
 と。と。い。ひ。又。秋。の。う。み。と。と。よ  
 分。葉。牛。花。や。い。う。り  
 つ。ま。て。ふ。れ。ま。の。す。く。れ。き



契とてやひ又日乳とま  
ふぬけりには病ちんをれと  
乃かたけるやどとんうれ  
とやどるふいせれとと  
あまに

何とがたにやある病いさや  
物れやあつとねるもの乳  
志つやや日と物乳のつとせ

病

病やふ病 病れと玉  
とく 病

やうー病にさうと病り  
乃あうりやうーい  
親きまういとん乳

如き病といひきと月を  
やどーいあう病と  
えあーやとにひる病。  
うんむあうといひな病。  
又あひきあう花壇り。  
あまうりふとやまが病に  
久たふあうらめう病  
子病と何やと病とあ  
乃病ととれ病とせん  
ぐりれ世とあひ。そ常乃  
風ハ何とさうう病の  
男とさうあひん病と  
とんー



吸の吸れりいさる家や丸はう

かるちみ家いせ海にぶげ水家

志乃百韻り

秋津のいさすけとう絆の家集

寄

わさ寄タ寄川寄 落寄  
うき寄ハ寄寄 寄ア人

寄

寄のうき 寄るるト ころ

こじりへりる海るる

韻

寄はりるるるるるるる

く海もいさえずすも波

るるるるるるるるるる

こ。浪をいこどあもかく

もて。あまらるるるるる

とるるるるるるるるる

ね。寄れ海とて。世界

乃もの人勇といひ。お乃

や。うも何。かといふ

る人々。人。寄るるるる

いひ。い。本の紫とんぐ

と。あひやり。タ寄とて

いさ井の底乃何よ人等

と。と。おろ。う。う。う。う

あ。ぐ。も

まはるる寄や一夫。海。浪



夢の海に世界はのびる

山くさ波のうりうり音の海意

え  
き  
う  
き  
う  
す  
う。

鹿

それとと  
肅然とする

つまふひちるこ萩原

とら山 かすり 麻野園

東第といふ程のうら

つゝもるを様乃すひ

とちあひか。かいらうと

もくしゑに。秋のむづしれ

ちぢりやうし。おき

うみき<sup>ま</sup>あて。あなをに

ふとあらまゝ山田

乃ひこれとあふ

き。廉ハあるこにもれず

牛ひろみき。ちの

獵師ハ山と見ぬ所の處

書とくふふふふふふふ

多分人あす今

ひとあそび鹿

康の字も義にふらぬ契り也

五

あまや藤の皮と萩の防家紙

探子康とて

世を為す所はこれなり



雁

初居 孫居 三津くり

是舟の居 きのひち居

旅居 落居 野居 海居 白居

むつさ 文 筆 常 石 葉

いづつづふ居 夢をたぬる

はとと 平海 とこふ ころ

更乃ちなよつとあるぞつち

節ととありし月新り

ひかりもる居とくれ常

といひ海をこりゆく城

とあれ筆といひくそ夢

をむにうる城。あふやあ

いひるん。れ獲長うこ

けくより。居いたまづこ

そひとひてよき伝達

文月乃えにとひくける

とも。うらぐもりになく

し。かくともいひ。又

ゆき乃をうとぶと矢文

よとともいひ。もぐりれ

海にふ居をたがもずさ

ひがと。あやむやうの

ふふ人かりうみ乃はく

あふさと。あふさ文字り

と。あふさ。されは梵字

ふふ字あともいひあり。



天門よりかきし 頼ぐと  
 りくそ 平治のらくかき  
 もとともいひつゞけゆる  
 文月にくるや 府はるはひ  
 夕音よきめはるやあまふ  
 夕音にき井れ 府やあまふ  
 きれづいひく 骨はるはひ  
 とふりや 親を親にゆく文字  
 月のあまにゆくにえさうてはる  
 かりぬ 結風おとらうかま  
 龍ひる 府やあまふひく 孝を孝  
 ねらうとふりねらうとふり 雲  
 撫のそとけりいかに 是はる重佳

白府と世上のふえさうて 吾安

八朝

白霧のこの

ふうこのことそひり  
 八朝あどくがりかり  
 けるとくやいさう世と  
 あやうとあまはるがふれ  
 むんかふとくに礼をを  
 あへ八朝後とくさう  
 づるもとゆる  
 はんさうとくくはるはる  
 月 五明いさふ くらあ花  
 おちねまら くらあ







うもひひそそもら月  
乃孰もむひてふ。天せれ  
びんぐこととも。山姫さふ。  
渠見ともたふあ。月明  
乃光りそ何づつあそ  
うへらひの孰とさうばき  
とひひり。又あるびふ。  
あるとふ。うあどもひ  
あせり。月能はる。う  
りる。りあれ。うあわく  
ハ餅とあうくずる。り  
うせ。又かつ。の系。あ。ち  
うひ。うともひひ。う。

うもろろふ。是。うて。は  
あどき。う。あ。あ。あ。  
くれ。あ。あ。う。ひ。う。  
あ。り。う。ひ。う。う。う。  
乃海。あ。う。う。う。う。  
も。ひ。ひ。う。う。う。う。  
と。中。宮。日。う。う。う。う。  
り。う。う。う。う。う。う。  
う。う。う。う。う。う。う。  
乃。月。秋。の。う。あ。う。あ。  
う。ひ。う。う。う。う。う。  
う。海。川。の。う。う。う。う。  
う。山。も。う。う。う。う。



ちふうらんやうり  
 ゆらん文文級の月  
 中ふうりううり  
 わくわくもききき  
 ばうわて新月の月  
 ともりうり九月十  
 三夜に雲の月とも  
 名月ともりうり  
 雲の月後のこひ  
 ともりうり月の  
 ちふうらんやうり  
 ちふうらんやうり  
 ちふうらんやうり

かくてあはれすべし。たに  
 やう月れ白くあらよとちと  
 よと鳴るをちりきりきり  
 残さうとあらうびそ  
 とありきそ教くとぬむ  
 うとこころにとりひれ  
 そとへ<sup>むげ</sup><sub>やうど</sub>宝珠とと  
 てふれんとむねとしひら  
 三日月やうさひらねて音ぬみ  
 舞海のそこら月くらば  
 りちりきらめくやぐざり  
 ぬきやまぢけ月がれたこの  
 月の人よりゆるぎやわ風のや



ありしむづにふる月れ  
お目と幾重の月一月のれ  
むとるおとや月とむづ  
月分びとそふあやうらん  
まに月、隠れんがうかつの  
こらむそいりわる月や鹿  
り山いらる月、海とむづ  
十八夜よあうりふれ  
ふとらふ無とらふや月  
月いふあふたふれあか  
十五あ月のれふあふ  
中目何むとらふと月、  
めとらふとらふとらふ

の月とらふとらふとらふ

八月十三夜よあうり

ふれ

ふとらふとらふとらふ

ふとらふとらふとらふ

ふとらふとらふとらふ

八月十夜よあうり

月ふとらふとらふとらふ

十八日にいはの國次

の浦よあうりあふの

こつかりこつあふと

あつかりこつあふと

あつかりこつあふと



彼うようれ筆の流も  
あひおてきる海り  
泪ぐまれゆるりくも  
いよれ清明あう月  
もくくやすきま  
らんも

十又衆とあつた源の月同  
中弼より平れ住みい  
お八福<sup>うきうき</sup>福もあふひん  
うにつくろ尾あり  
月見乃ちくあむてと  
と一村あり  
松よしも月も三本<sup>三本</sup>中弼を同

つるてうもはの月一  
月とこひ十三<sup>が</sup>佛乃ひり即同  
あふぬのあかきへん終の月平  
月の影あかきやま外かへる  
あつたきとにへ月見り  
あつりて

こひひ文何ひん月やま各武  
九月十三日り月れ三  
白えりよ  
もてやあそ月をいびくも同  
いのちふたのあそ月同  
望月乃れを急にく  
あつたきとあ合せく



野々三三

新立園 初名親皇信鑑屋市五

園

かきつひさひのちや明月記を  
十文紙のうへに月影のきぬき  
幾つあつた月やえん二端  
ふもれる月をみて

電光ゆく月ハおもふ面也 貞重

小園にて

月早やみだのちをみだのち  
後思連歌乃海坐り  
初きえよ月と世はつひき  
秋如堂よりうづら  
乃月

月やこころは九かあつた  
かきつひさひのちや明月記を  
月乃極くハ月中よりみだ  
みだのちをみだのち  
にみだのち。性ハ名ハ剛。是  
を月ハ男とくハ極男とく  
いひつゝハ月乃極とく  
月乃極 五蟬とくハ云て  
かきつひさひのちや明月記を  
月乃極とくハ白虎とくハ  
みだのちをみだのち。月乃  
とくハ云て。さあつた  
うづらハあつた



後よひるるやふき来る月 齋  
てふとにふあうふあふあ  
かきつひふひのふや明日記を  
十ふあうふあふあふあふあ  
後よあふあふあふあふあ  
ふあふあふあふあふあ

電るゆふ月ふあふあふあ

小國

月早やふあふあふあふあ  
後思連歌乃海坐り  
初きふふ月ふあふあふあ  
秋如堂ふあふあふあ  
乃月

月やふあふあふあふあ  
かきつひふひのふや明日記を  
十ふあうふあふあふあふあ  
後よあふあふあふあふあ  
ふあふあふあふあふあ  
月早やふあふあふあふあ  
後思連歌乃海坐り  
初きふふ月ふあふあふあ  
秋如堂ふあふあふあ  
乃月



あどなうしん。りへ佛あは

八所御靈系

上清子

下

八月十八日 祭ニ  
靈祭あり

治世にあはれ何事をも  
 人にゆるすはよきこと  
 なるべしといふは  
 人の心をはなれざる  
 ことなりといふは  
 人の心をなすこと  
 なりといふは  
 人の心をなすこと  
 なりといふは

中女系

下京に一所いふありて  
つゝめたる半女桃とて  
名ぞえたる桃とてうり  
物たるなりとせ

神あつてもいふや、安桃、速急

擣衣

徳  
軍  
志  
方  
う  
ち

あまき 榎

風乃さきひてきあへて  
音なきを里乃取ふじとも  
さひやり。書あつて  
うら<sup>やうら</sup>驚あてひとびし



夏乃つらういかるをに  
 ちてかゝるうとなれ唐  
 衣のきをうへあうきり  
 ひるを白絹をいひさうく。  
 ねるうといふりうりて。  
 初居乃流り指子。ねる入  
 びやうしあどいひて山  
 乃うへそといひし  
 ゆる

たぐかおるうで乃つらわ  
 山青やきあふねたれ指子。ねる  
 礎を探取まうりて。  
 うらねるうあふねつて同

虫

しるうねるねり  
 響りきりくねあし  
 うさうこふきや。幅根  
 こふあいまいもあまけり  
 ねるさ虫あやうき舞すく  
 ようのうきうくちんちり  
 つてさせあま

虫と撰うへ人そり  
 暖陽野うりて道遠  
 け。虫をねて舞よられて。  
 大肉にあらうせり  
 とねいおれ世とかなる侍  
 ないこつかこつと



めくさてもつりゆるさ  
きだむりくつりれ  
山乃べのうきとほ  
つりくわんとつれ  
りぞぐ乃重もてどく  
きくわつりさ海ふさ  
が家と命ふくすさく  
ふへられゆく秋と  
あふする乃べれ  
もくしーい湯よ  
きハあさくわと  
みでふ萩が筒  
かきもくさくひ  
ハ松よたよりてせんさい  
ふくわねねりさ  
又人まのしり  
りりれ弱つみぎ  
乃きときく  
むよさく  
めこれづか  
坂まきりへ  
玉重乃  
と何れ  
をつづ  
懺悔乃  
しーれ  
鬼を

ハ松よたよりてせんさい  
ふくわねねりさ  
又人まのしり  
りりれ弱つみぎ  
乃きときく  
むよさく  
めこれづか  
坂まきりへ  
玉重乃  
と何れ  
をつづ  
懺悔乃  
しーれ  
鬼を







めづろハあぐーに  
 ちづひもあどもつ  
 ねねやえと海ざらひ  
 といふを感へるも  
 見えてぬひぐをわづれ  
 と。あうーとふはぐと  
 ねづろもあつるあふ  
 くらふあどもひあつる  
 軍かゝるも海どぬ山踏ふ

鶏

かころろ かもろろ  
 うろろこ うろろこ

鶏合 鶏衣 うろろ ころもら  
 うろろまら ちあろ ちのうろ

うろ

うづろ尾乃こころか  
 なるれん三勢ハ何なりか  
 とあつるもがいはく  
 ありにちあつるもひ  
 りくちあつるもひ  
 父あに乳にもろくえん  
 ー。ちあつるもひ  
 あどもひひひろろ  
 ぐさといふもくハ  
 乃ちこころろろろ  
 うづろまらとていせこ  
 ろろろろろろろろ



ひとびとにあらうかみかき  
かみかきあらうかみかき

山きき 姥鴨 川原鴨

鴨 ころもき 鴨のえきり

あきつさけ

新にとまるかき鴨と

かき鴨のたのふくらめ

とあきつさけきききき

あきつさけきききき

やんごころあききき

まてはるあきききき

さうあきききききき

とあききききききき

鴨

鴨のまききききき

鴨のめきききききき

けきききききききき

けきききききききき

けきききききききき

けきききききききき

けきききききききき

けきききききききき

紅葉

初紅葉 すすもき

やまの紅葉 下紅葉

村紅葉 すすもき

梅桜 すすもき



昔楓久紫お紫ふふお紫れ

お紫乃土器 瓶の柱 くく

うむろ かつらろ 久あうらろ

岩綿 高町敷わく 吉田

高尾 通天橋

常盤山乃乃何ふと松を

時ぬれをわくまとうこ

がひふらの森うてもふ系

うむろけかとおやーこ

又山乃るれ久津ろと赤人

まろにふせ標のこむろ乃

かのくろくふ城人丸れう

ろいひあー。又梅がえ

ろんもこつるふそのが彫成

るん金にくといひ橋のお紫

ハ又花をやふあといふ人

なへをまべー。すべて万本

乃又何ろとぞおよつあて

あーきとと何ともいひ

あーて。あかがらうりお紫

といふざれとともあ紫ろふ

ありゆーん

う高尾にあせてあふれお紫ろ

下口上早がれ座あや村とみち

紅葉うて又をとや高橋くれ

源氏酒はあひてや久お紫れ



昔はあてはつゝる人朱の糸  
お茶する山くきふきふ  
熟練<sup>まじ</sup>をえ上るふや柳お茶をえ  
ひえ乃やまより乃ばり  
ゆきゆきゆきゆき  
お茶のちりけさるゆて  
山風やお茶おて火やき獄<sup>ごり</sup>害  
ふゆふふふふふふふふふ  
久茶といふとあふふふ  
ふてゆふふふふふふふ  
にいふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふ  
ひふふふふふふふふ

花よあふふふふふふふふ  
松やまふふふふふふふふ  
七葉乃かていふふふふふ  
人のふふふふふふふふ  
といふふふふふふふ  
いふふふふふふふふ  
秋のいふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふ  
楓いふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふ  
てふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ







ありきりりひ菊を酒  
 下口とせよあといふ  
 ふといひゆる。又りーあも  
 凡ありー酒とせひひ程と  
 りさふさふれあもあぢの  
 られさささささささで。  
 ありひをささささされん  
 ぐんあささささ菊と酒  
 けさ

仙人の世界さ菊はあささ  
 病さひんさささ此年の肉  
 おせは菊乃句ひれあせこり  
 はひ社のさひのあさ菊のあ

菊酒乃下口と上只酒漱水

重陽の日

法と菊の家やさささ後海花  
 菊乃九句と志けーさ

酒さささささの菊池やさ  
 ささささささ此節供物やさ  
 花の皮におささささ菊酒良保  
 さささささささ菊酒けさ  
 かさ菊もさささ秋津にささ屋信  
 ささまた祀神ささ。あささ  
 いららさささささささ  
 中さ禁中仙洞さ中宮をさ  
 ささささささささささ月



あゝ庵りるらん

九月

扶力書

中

かふた

阿き乃れに聲をうへん  
 りしも夢をいづれやそれ  
 おもひあはるゝとていと  
 えは庭のまじりぬる花  
 が城のうしろの籬よりぞ  
 顔<sup>おも</sup>あらわすかゝらえ  
 こゝにふたりのつゆと  
 うるさくさく文ゆく  
 秋の夕陽を照らす人  
 うゝともあるいはし

きんぐんあといふー  
やなまもつたふがふんたふれ



山之井冬部

初冬

神正月 小春 亥子

十月とくこれ日どのより  
後とあれと後とや世<sup>セ</sup>信<sup>シ</sup>よ  
いと物よりうらぐの神なり。  
出<sup>デ</sup>る乃國よりいあらとや  
いん神のふでと乳氏子  
とまれよおうれう  
すともうやふびーま  
氣又又ぬ乃宮のぬちに  
降る所ぬをあらーと。  
風の神を月うらうふ



本乃葉をとらぬ葉れら  
しわろ残能若月やしらへ  
霜柱をふくもふくも  
若月あといひあし。た紙  
ふ月髪ふ月なるとえん  
り。うりてとつり。ふ春  
ハ子に替へてえりうも  
十月めりうひとも。ふ  
乃内にういづれあふ  
りひ又うりむくか  
ひくも。初雪もやうく  
とけてふたにうれとけ  
ふくもつてふく

ふあふくも十月あふく春  
霜月乃あふたつあふく  
十月といあやえれあふ  
ふくもあふくあふく  
霜柱をふくもふくも  
い月乃あふれ日。餅をば  
くひゆり。ふくあふく  
さるふくあふくあふく  
て大肉にふくあふく  
からんてふくあふく  
菊ふきなどこきふ  
いてふくあふくあふく  
あふくあふくあふく



志もが志もにともかく  
 新アミおあひさあうす  
 福とくはてしなく  
 りもつきねあどこ  
 おきーゆ

志より世に志より世に

懷乃乃  
人々  
乃乃  
乃乃  
乃乃

病藥

朽紫 木の紫 落紫  
木の紫時ぬ この六つ

木の葉を物　らゝゝゝゝゝ  
 落葉社とつひてゐる。霜雪の  
 らうぬれあるにかき<sup>さ</sup>サガ衣  
 ろうゝもぎあどつひね。

朱乃紫猿といひて朱が  
 かつたをよせ。朱乃  
 紫天物といふは。暢つものい  
 よかつた。た。あを  
 と。ふ。山。乃。も。け  
 あ。言。の。流。と。ひ  
 き。森。も。あ。つ。る  
 り。ふ。又。朱。が。あ  
 乃。と。紫。を。よ。せ。落。葉。れ  
 文。の。名。残。を。風。乃。ら。く  
 さ。り。名。中。の。何。り。あ。ま。  
 う。知。ふ。あ。う。新。京。氣  
 あ。う。も



空しくぬれ葉も風がゆりー久  
 猿も木がわらうなを木葉が  
 木が葉うく川流のうづや猿が木葉  
 庭にうさぎが葉がひが山を保  
 いこまや海わしに木もあらぬ葉  
 時雨 ちりれりあわ初ーくれ  
 村のぬ 時雨のすう々々時雨  
 さようしれ 木がぬ 木がぬ  
 うさぎをさうさうさうさう  
 とちりる ちりる  
 あぐれいえちりびえんたあ  
 うろーとふれんぶさうさう  
 と是なり。あるとたふへん。

雨くちももあけぬ氣分。  
 是がやに通るゆへに海ふ  
 とさうひく。月がさうさ  
 さよあぐれ。時雨のあわや  
 下りたあぐれはさうさう。  
 ゆが海にさうさうにさうさ。  
 泥獄あぐり。あぐり。とさ  
 かんくりあとのさうさうと  
 ちりめだが海にさうさうと  
 ああさうさうさうさうさう。  
 雪中のさうさうさうさう  
 とさう。さうさうさうさうが  
 海にさうさうさうさうさう



是るや花を時を風ふりて  
山うへが原や志くらぬあけ

冬月

月のかげ さゆる

うえさる新ちふあまの  
おきりし似る氣ふ龍乃  
志んよまの月と流しきお  
としのふを女あおさうに  
もふがへ臘月といひけ  
て灯乃光あといひあ  
ゆる

ととゆもよき臘月光るや

冬月乃文ひける人あ

あへうく

ひきんよ月東冬がじ志栗

霜

霜花 八重しも 霜乃花  
霜柱 霜を舐 霜れそ

霜乃誘 霜れ 霜れそ

う いとよさゆるこゆる

霜乃むといひてはこれ

ぬゆふ花あもよき日新

りしとろき新龍乃あま

にもくくへ霜柱といひ

てふかききぎれ橋ぐいと

と音ひぐく後つき堂か

とといひあは。霜花ハこと



りーえらーとて月れきう  
とさむあぶら風とこれ  
りて結びえきとあくふ  
と人まづろありーきうく  
ひわうぶらととあとの剣乃  
志まふに地やせこちんて  
りーいとあぶれとて  
ねろくうらととあぶれさ  
うんあぶ

はね清ひく福さる志まくわ  
あかかひつき堂やあかひ  
かきあけ橋あふれやあか  
鬼神ともか金ぐらんあかひ

要法ありて

まや清のき枝本をあくらあ

法ありて

大ひうてあふけうぶああ懐あ

霰 ああれさうさうあ

あふれあびさー根條あ  
うあふたきやあふらふ  
と人かきさうあてかりー  
けさうたはあろつらふと  
ああくとりうあうやあ  
あねとああさうあ



きふりしれろふけきも  
いひあしめられ金<sup>がま</sup>殿も  
ゆめゆめ

盃やさげふる来にわれ酒  
やたうや竹葉炮乃むわれ

われ金とて

ふけきふるうやふけき

なきうや湯むたりふけき金<sup>がま</sup>殿

雲  
雪うられ

三ぞれハゆめく酒にふせつ

篠乃義松紫とさうら<sup>う</sup>や

といひる<sup>てふ</sup>。天<sup>てん</sup>あふと

と酒壺とともふかせり。又

ふけきといふ酒あもそへ

海もあもといひく

何ゆにまうるとて

ふけきやうふけきあふれ

雲  
初雪の見ふ ち<sup>ち</sup>雪  
われ雪とわれ雪うす雪

雪乃花しり花かといふ雪

衾雪とわれ雪とわれ雪こゆき

雪の山雪の雪雪汗雪女 雪佛

うらうつとつとつとつと

雪雪富士かひふ 雪雪雪

初雪ふきに餅乃るう。雪に



む乃ちきこえんやうり。  
めづくくういひあ。  
竹ふつくる詠めにくう。  
城をや。松乃こぞあれ  
あく吾ふれらるもわい  
にるゆきき。うひもの  
をとり。谷と埋つて。  
山も乃隠るあさとれつ。  
も詠をく。を歌ふ。  
やせ小僧ハともよむべき  
なをまぐひ。新うりきれ  
山が。もたれあ。こづけ  
乃吾城よりづる。なをへえ

やくす。も吾とあり。が  
ま。と詠と。何うういひ。  
さ海かん。さやきりり  
乃。もん。これ旅人をた  
もいやり。つとを吾とかがり。  
つと。む。吾とあき。何り  
く。木から乃。い。とあがた。  
な。と。さ。ね。王子。歌乃  
も。ひ。く。を。か。げ。う  
白居易乃。う。う。と。庭。中。  
あ。乃。さ。り。か。ひ。の。あ。  
祢を。ひ。か。ま。へ。り。は。も  
ま。る。城。殿。士。り。作。り。



住吉乃娘のふさも源氏乃  
とやれとやびあどとと  
ふひよせ程雪こるる  
雪うらにふと残さき  
ぬ人志飛りふ雪やこふこと  
いひるや。ええりり  
しとこととあはれとと  
乃分わり雪とととととと  
祢るに

かると雪と何と何と雪と  
うらと雪と何と何と雪と  
あつ雪と何と何と雪と  
しととととととととと

中のもや一ね白髪山の雪  
北松のうとく雪やうとく  
かきとれてうとく雪と雪  
とと雪と雪にいかれとと雪  
葉もめく餅雪うとく雪と  
雪とととととととととと  
雪のうと月や金色銀世界  
かつととととととととと  
ひうととととととととと  
はととととととととと  
雪は雪とととととととと  
とととととととととと



加友

荒木希庵は西平侯と  
言ふなり  
宣之入中同將勢州と書陽子  
加友ト同名ノ仇ナリ  
是カラスト多アリ

松永貞佐ノ家重ニ人育

瑞皇満足後著

年長ニテ海を伝ふ海客ニ勢年ナ  
親ガ利ナリ山ノ海客ニ是ニ

海客やありぬふと沙室守と  
るりふぬとふふと海やうふ  
と利勢セリ志う何事かじ  
断てすべうとてといふ人  
何れも自然を説ふ何れ  
もその中にいひて人ト只  
尋常れ海客も種々なり

女みー仙といひて人ハ  
そのふきと入りおとあり。  
とて是にかきとひとれ  
りさ花ふがうとてま。  
とてとてとてとてとてとて  
あつやうとてとてとてとて  
りうぬとそれといひん  
いさう吹味ゆとへきとや

水仙花

玉葉 草花 金盞  
銀臺

霜がれ乃ち中よいらざ  
うく咲出るとと菊より  
束れをうとてとてとて







雪乃むりんちうぐひく  
いたすのせんといときか  
わらんちもつらん文葛と  
て作らんせんとい人  
花瓶乃口をすいせんとい  
あといなり

あき紫もや花瓶の景を念ふれ

氷

ふす少 雪少 雪少 雪少

いふん少のれはく

うひむいふとつ

わつ

あははらきといひて雪  
乃あれといひ。雪はり

あまふんといひ。波乃鼓と  
ねはとあり。波乃系もま  
ひすひりむふり  
きをつね池の曇れ天井  
らんあられ床板とる  
ありき海。又蛇と乃津れ。  
鬼がらん乃きをばかん  
てつらん

あめりきとえんれ鏡子  
鏡子乃目れ衣と乃水れ  
籠よとあ漏る。あ少那  
かんつとれ水あ。國にちり  
文字はとあてんる。あ那一滴



水多

それな海 あらうさ  
何れも さき くらうと

とく ちれしき ちり

うなるふまり くらにま

池海深き

あまはしき 乃枕より

おまれ麻より 羽をうき

波の鼓にききうへ あまり

ふかかきききき 又あに

しりふかき 河川の鴨より

乃海なる 鴨を ああえん

しりれき 海より 雲霞

しりうき げの 雲にけき

羽をうき 乃人あて

あにきき 乃人あて

何れも 乃人あて

えんきき 乃人あて

はにきき 乃人あて

ちりきき 乃人あて

さしきき 乃人あて

あにきき 乃人あて

ちりきき 乃人あて

つちきき 乃人あて

くらきき 乃人あて

くらきき 乃人あて

くらきき 乃人あて











憐むらあぐす人

せうきやあうきる中炭歌

こいておるも照ゆるあ火痛や

ちぐきいふととれがひの

すこころやれびと人ふれつきを

おとが、百重奏すもがら幸和

里がく内物お 庵火

神樂 揺拍あ 拂 幣 針

韓神 やうて 星 朝あ

金つあ 酒あ 鈴とひきし

和琴 とも 福き 三き

神樂ハあまてるあやんも

天乃磐戸よ幽居々れい

六合とこやとありて

らるひふうとらなるり

ける時天鉦女れ神かつ

こもきさうけ竹系飲醴

乃木紫残多まうり

やこともちあど

被盤戸乃あまて歌舞

とあーたあひまればす

あんらいつとちうあて

日乃神せり何くられ

あひ人忠歌とと志あく

乃つれんあ乃神さち

悦ひあひつとれあひと



くらり 阿波被阿那於  
 志品とれしあひ言ふと  
 り。されんれもてあつさ  
 いらどのけりあやうとい  
 ひあーまねがうすれ  
 神がうあねぶありさ  
 海あといひさそ又ここ  
 やとふれてあうり  
 うふあふんねううくろ  
 ねのきりーんいさあれを  
 あきさあといふべー  
 おそけきかぞとあけを  
 子句才十り

とこやまを何うあふれと神子孫を

探歌子神樂をとく

きこひ坐につやふあ神樂を

御火焼 祇園 八所市  
今更かまよれ火焼

あうまうり子孫二まうん

霜月乃あやうけあう

れ庭火とまねふとやん

ふ。あうまうりといふ八日

乃目ありれあやうけ

かふおの祇園人れいあて

いとひはく。あうれ飯やと

なゆる。子孫いふれ日。大黒



うめわさけりうらうら  
つゝゝゝ義治をともまつり  
ゆるあけそを曉りしに。陰陽師  
のうりり。ゆるる。あびと。大  
まれば。陰陽をいつひこめて。  
あめ乃。信。おに。二。あ。れ。大。根  
そつて。ゆる。ゆる。祇園。ハ。む  
まの。月。お。お。社。あ。は。り。は  
り。と。よ。つ。は。わ。系。乃。氏。子  
と。も。ち。い。さ。な。と。う。と。を  
町。く。り。か。き。と。入。つ。  
大。る。ま。た。き。も。を。は。き。も。て。  
あ。や。う。も。い。え。な。ひ。う。ら。

おと。と。と。と。き。あ。と。な。り  
ゆる。の。海。を。や。い。十八。日。佛  
霊。八。十八。日。お。あ。つ。れ。日。よ  
ゆる。れ。む。な。り。す。べ。て。あ。く  
あ。と。り。ま。う。ぶ。と。那。乃  
た。わ。さ。け。の。ゆる。と。な。り。さ。れ  
む。と。さ。あ。乃。ひ。う。り。を。お。老  
乃。お。り。け。り。り。の。勢。又。あ。い  
が。う。れ。あ。き。は。く。る。ほ。む。む  
と。び。さ。う。う。る。あ。と。へ。と。も  
り。む。果。報。を。ね。ま。つ。り。あ。ど  
う。へ。と。い。り。り  
ね。あ。つ。り。り



うきまゝをふかぬつち大根重

# 年内立春

冬乃肉よりくるくるは。  
元ハまふいやすきもや。  
雪の勢もやうくく。  
ひやであるうき。又  
新瑞乃梅ははなとや  
らぬと梅の香り餅の  
くらゐも新くくらゐ。  
とありひとくうく。  
てくるとも。冬乃うく  
うきうきとくうく。

冬乃肉よりくるくるは

元ハまふいやすきもや

## 歳暮

ゆとり ふうく 年乃うく 晩年

歳末 除夜 大はこもり

とく 歳末 冬乃うく

やくおと

たひはこもりハ一年

くそふれハ目くれぬ

りはあてふかを

目くぬそらん

あうく冬ハせく

きんぐゆくとく



あはれそなたあはれぬん  
ふへあといひ又をきか  
しとむれもなうられや  
うりもこれのづゑ。鏡乃  
わもく鹿もちもつあて  
えんるをうらうぶうり  
さ海がやうらぐりぞうと。  
たてもあつゆづりきもて  
うりきせきぞあうやう海  
しく傷鏡しひ乃せう  
ふきゆきらぶあやち  
乃れえ。う乃きぬとふ  
うへひ。五月小蛇やうく

ぐりがまれこけらめやう  
乃れ銅鑪あててうし  
そく。そやどくれ家く  
乃ちうけ。さ日まればよび  
ひく。うやうりにゆき  
うへん。乃ていあどと。  
ええん。うりやうていひ  
あはれ。

鹿もちもつきてあふあはれや  
す。あはれこれのそれあ  
ゆき。あやう。あつたはあ  
えん。あつたはあ。あうや  
あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。







とーゆゑ。扱やぐらうひ  
 とつふ。物のつらうをり。  
 ともあめさうせつま。い  
 み百いす。せあうりや  
 ーふさする。りもあ  
 ぬ。されどひさの葉ま。  
 鬼乃あふ。こも。あつま  
 ぬ。きとづり。さつひ。そ  
 いろー。乃かー。らも。後ド  
 ー。弗氣さ。ら。く。あ。ま  
 たりさ。海。さ。く。かん。あ  
 さん。ら。う。には。む。る。あ  
 ひを。驚く。く。ん。あ。ど

志乃。又。海を。後か。あ。く  
 少。主。海乃。さ。う。り。あ。ま  
 け。く。さ。あ。乃。ま。れ。あ。け  
 中。ん。あ。さ。め。あ。ー。た。れ。と  
 す。つ。る。り。も。あ。う。や  
 ー。乃。あ。に。性。あ。せ。ぬ。と  
 れ。あ。と。い。ひ。く。す。る。あ。今  
 乃。女。さ。う。い。つ。れ。と。と  
 乃。水。と。あ。ら。む。さ。う。あ。あ  
 一。二。一。と。ー。み。あ。ひ。あ。あ  
 明日。よ。あ。あ。あ。ー。と  
 除。あ。よ。た。鬼。さ。う。ひ。く。あ。あ。あ



あら乃々修好よりれと  
りるりあれと能指は日  
あて造次あもさひ願沛  
あもつひおれハつるふ  
はとつる人のさあひほ  
まむせめくひとほり  
ひろくたにつふ福く  
むく登きもそつる  
くもく六かじんう  
もあひらる事あと  
あうんとあひあへ  
まくととらう地  
福なひはほあんな

ふねとあふれを何とま  
へきうる人もあ  
はるあうり  
四乃時あかんりゆ  
元れ福めあさう又  
目りあふらぬとれ  
ううりある今乃  
ろをせもあれは  
りあうりやう  
のられあうり  
しあせふさこゆれ集を  
うひあはる乃翁一囊子  
二家れ白帳中より







正保甲戌一陽天  
 句教之事  
 可理二  
 是安一  
 不貼一  
 友三  
 正負一

九二  
 正保甲戌一陽天  
 句教之事  
 可理二  
 是安一  
 不貼一  
 友三  
 正負一

正保甲戌一陽天

句教之事

可理二  
 是安一  
 不貼一  
 友三  
 正負一

正保甲戌一陽天  
 句教之事

正保甲戌一陽天  
 句教之事

正保甲戌一陽天  
 句教之事





